

「ハムレット」地誌考

その他（別言語等） のタイトル	Shakespeare's Place-Names Commentary : Hamlet
著者	竹内 豊
雑誌名	室蘭工業大学研究報告. 文科編
巻	9
号	3
ページ	443-460
発行年	1978-11-20
URL	http://hdl.handle.net/10258/3373

『ハムレット』地誌考

竹 内 豊

Shakespeare's Place-Names Commentary

Hamlet

Yutaka Takeuchi

Abstract

This commentary is designed to treat the names of places in Shakespeare's plays. Admitting that the names of places are formally recorded in a few editions as words themselves, they are summarily dismissed—usually in a line. The names of places stand in the background of the natural environment, and they are closely related with history of man.

This commentary is attempted in the belief that knowledge of names of places is an important step in understanding human works in many fields—especially in literature.

1 Elsinore I. I. ト書

シェラン島（シーランド島）Sjælland の北東端にある都市で、デンマークでは Helsingør（ヘルシンゲア、ヘルシンガー）という。デンマークの首都コペンハーゲン Copenhagen（デンマーク語ではケーベンハウン København）から北へ鉄道で 43km の地で、ここから幅僅か 4.5km のエラスンド海峡 ϕ resund¹⁾ を隔ててスウェーデンの都市ヘルシングボルイ Helsingborg と相対し、両者の間にはフェリ・ボートが頻繁に往来している。所要時間は20分である。

ヘルシングアは海上交通の要衝として地理的に重要な位置にあるため、ヴァイキング時代（9—10世紀）既にデン人人のヴァイキングの根拠地となり原始的な城塞が築かれていた。1389年にポメラニア²⁾のエーリック Eric of Pommern (Eric of Pomerania)(ca. 1382—1459. 6. 16)がノールウェーの国王に推され、更に彼は1397年スウェーデンのカルマル Kalmar のカルマル城で行われた「カルマルの会盟」Kalmarmødet によってノールウェー、スウェーデン、デンマーク三国の王となった。やがて彼はヴァイキングの城塞の跡に築城し、これにクローネン Krogen の名をつけた。Krogen とは英語の 'hook'（「鉤」とか「川の鋭い屈折部」、「海に突き出た陸地」等の意）の意味である。この築城の目的の一つは彼が1426年に制定した海峡通行税の取立てがこの頃充分に行われなくなったことに対処するためと、今一つはバルト海一帯の支配を確立するためであった。前者、すなわちエラスンド海峡を通るすべての外国の船舶から通行税を取る権利は1857年に関係諸国から約6,000万クローネの補償金を得て廃棄されたが、その間400年以上の長期にわたってこの通行税はデンマーク経済を潤しつづけたのであった。

その後フレデリック二世 Frederik II（英語では Frederick, 1534. 7. 1—1588. 4. 4）はオランダの建築家ハンス・ファン・パエスチエン Hans van Paeschen とアンソニス・ファン・オッベルゲン Anthonis van Opbergen に新しい城の構築を命じた。工事は1574年から始められ、クローネン城の原型が生かされながら、四辺形のグラント・プランを持つ砲郭を備えたルネッサンス様式の荘麗な城が1585年に完成した。これが現在クロンボア（クロンボルグ、クロンボー、クロンボーグ）城 Kronborg Slot とよばれるものである。1629年に火災に遭い、また1658年にスウェーデンとの戦いなどで傷んだが、1924年から1934年にかけて完全に修復・復元された。城は市街の北東に位置し、エラスンド海峡を隔ててスウェーデンに対峙し、昔の砲門が海に向けて並べられている。城は、高さがそれぞれ一定しない4本の高い尖塔と、やや低い3本の円型尖塔を構え、青銅色の屋根を持つ北欧ルネッサンス様式の城館には城壁の上に鋸状の胸壁は無く、本劇第1幕の胸壁上での歩哨の描写

とは全く結びつかない。本劇の城のモデルはエーリック王が建てたクローネン城のことと考えられている。しかしながら今日殆んどの人がこのクロンボア城を『ハムレット』の舞台と信じて疑わず、そのための観光客が絶えない。そのような物知らぬ観光客の気持を十分に満足させるためか、城壁の一隅にシェイクスピアの肖像が浮彫された碑板が埋め込まれている。

2 Wittenberg

I. II. 113

東ドイツのハレ県 Halle にあり、南西 60 km にハレ、南南西 70km にライプツィヒ Leipzig、北東 88km にベルリン Berlin があって、これらに通ずる鉄道の交差点に位置し、またベルリン=ニュルンベルク間のアウトバーン（高速自動車道路）のインターチェンジの東方 18km にあり、またエルベ川 Elbe の河港でもあるように交通の要衝に当り、繊維、紙、アルコール、皮革、薬品、石鹼、チョコレート、セメントなどを産する工業都市である。

1517 年に始まった宗教改革の発生地はこの町はイギリスのプロテスタントにとっては「ルターの町」として知られ、またこの町にある 1502 年創立の大学（1817 年県都のハレ大学に統合された）もやはり同じく「ルターの大学」として知られている通り、マルティン・ルター Martin Luther (1483. 11. 10—1546. 2. 18) はこの町の、この大学の神学教授であった。1517 年 10 月 31 日、34 歳のこの若い神学教授ルターは、この町の城教会 Schloßkirche の門扉に 95 ヶ条の提題 Die 95 Thesen を掲げてローマ法王の贖宥状 Indulgentia (Indulgence) 販売を攻撃したのであった。

さて王子ハムレットがこの大学に留学したという劇中の叙述はシェイクスピアの時代錯誤というか、創作である。それはハムレットの物語は北欧民族の古い神話伝説にまで溯ることが出来る程古いものであり、またこのような伝説が完全な形で伝えられている現存最古の文献が 13 世紀に世にあらわされたサクソー・グラマティクス Saxo Grammaticus³⁾ の『デンマーク史』であり、一方ヴィッテンベルク大学の創立は上述のように 1502 年であるからであ

る。ただエリザベス朝の劇通にはこの大学はマーロウ Christopher Marlowe (1564. 2. 26—1593. 5. 30) の『ドクター・ファウスタス』 *Dr Faustus* の主人公ドクター・ファウスタスの「悲劇的な生と死」の舞台として知られていたのである。すなわちファウスタスはヴィッテンベルク大学に遊学して神学を修めた。聡明無比の天性に恵れた彼は衆人に挺んで16人の学士を凌いで神学博士となったが、やがて傲慢不遜にして妄想を逞しくし、聖書を放棄して邪道に迷い込み、呪文・魔符の用法を修めて悪魔と交わるようになったのであった。彼はヴィッテンベルクの夜の郊外の森で悪魔を呼び出し、やがて悪魔と24年の契約を結んで己が心身一切を悪魔に委ねたのであった。こうして彼はこのヴィッテンベルクに住みついて、こゝから世界各地に旅しこゝに戻って来ているのであった。

この町は第2次世界大戦で1945年4月27日ソ連軍に占領され、今はドイツ民主主義共和国(東ドイツ)の中にある。

余計なことを一つ。それは東ドイツにこの Wittenberg に似た紛らわしい町 Wittenberge と Wittenburg があることである。

3 Rhenish I. IV. 10

この語そのものは勿論地名ではないが、その名詞は地名であるのでこゝに記す。形容詞としてのこの用法は今では古い。今は通例 Rhine を形容詞的に用いる。名詞は言う迄もなくライン川 Rhine (ドイツ語で Rhein) のこと。

ライン川はイタリア国境に近いスイスのサンゴタル St. Got(t)hard (イタリア語でサンゴタルド San Gottardo, ドイツ語でザンクトゴットアルト Sankt Gotthard) 山塊の同名の峠 Passo del San Gottardo (St. Gotthard Pass) の東北12kmのトゥーマ湖 Toma に源を発する。この湖は海拔2300mにある長さ250m、幅70mのものである。ここから流れは「前方ライン」Vorderrhein の名をもって北東に向って急な溪流を成し、途中メデルゼエルライン Medelserrhein, グレナー Glenner, ラビュサ Rabiusa の支流を合わせる。トゥーマ湖から約70kmのライヒナウ Reichenau で今一つの源流である「後方ライ

ン」Hinterrheinと合流して「アルプスライン」Alpenrheinの名でよばれ、グラウビュンデン Graubünden 州の州都クーア Chur (フランス語 Coire, イタリア語 Coira, ラテン語 Curia Rhaetorum) でプレッサー川 Plessur を受け入れて、川は直角に左折して北上し、右岸で2つ、左岸で1つの支流を合わせ、やがて世界の小国リヒテンシュタイン公国 Liechtenstein との国境を流れ、この公国の首都ヴァドーツ Vaduz を右岸に見て、間もなく今度はオーストリアとの国境に沿って更に北流してボーデン湖 Bodensee (Lake of Constance) の東端に流れ込み、この湖の西北端のコンスタンツ Konstanz を流れ出る。コンスタンツは16世紀から19世紀までドイツ最大の司教区であった町であり、また交通の要所から通商上重要な都市であって中世、アムステルダムやロンドンなどが新しい通商中心地となるまではヨーロッパで最も繁栄した町であった。

さてライン川はこゝから西に向って支湖のウンター湖 Unter See を通ってシュタイン Stein で再び川となるが、それは急流となってシアッフハウゼン Schaffhausen の下流右岸のノイハウゼン Neuhausen 及び左岸のラウフェン Laufen では幅113—115m、高さ約21m程の滝、すなわち「ラインの滝」Rheinfall (Falls of Rhine) となっている。それ故にこれらの町はそれぞれ Neuhausen am Rheinfall, Laufen am Rheinfall ともいわれる。川は南と北から数本の支流を呑みながらドイツとの国境に沿って西流してバーゼル Basel に達する。こゝまでの120kmを「高ライン」Hochrhein とよんでいる。「高ライン」は「ラインの滝」を過ぎると深さも幅も舟航が可能な大きさとはなるが、バーゼル上流のラインフェルデン Rheinfelden までは多数の発電ダムのために実際はそれが不可能となっている。地図で一目瞭然、ライン川はバーゼルで90度の鋭い角度で右折して北に向い、今度はドイツとフランスの国境を形成して、印刷術を発明したヨハネス・グーテンベルク Johannes Gutenberg (ca. 1399—1468. 2. 3) の町マインツ Mainz まで直線となる。しかしフランスとドイツの国境を成す部分はこのバーゼルからマインツまでではなく、バーゼルから170kmにあるフランスのロテルブール Lauterbourg までである。バーゼルからマインツの約300kmが「上部ライン」Oberrheinとい

われる。ここは地質的に「ライン地溝」Oberrheintalgraben, Rheintalgrabenと称されるものの一部を占め豊沃な緑の田園の続くオーバーライン平野 Oberrheinische Tiefebene をゆっくりと流れ、この間の大都市といえば左岸にあるフランスのストラスブール Strasbourg 以外にはなく、全くの典型的アルザス Alsace 風景を展開するのである。ストラスブールで左からイル川 Ill を受け入れたライン川はロテルブールでアルザスの風景とも別れていよいよ西ドイツ国内に入る。途中工業都市のマンハイム Mannheimで、ハイデルベルク Heidelberg の美しい古城を写したネッカー川 Neckar を右岸に合流し、ヴォルムス Worms, オッペンハイム Oppenheimなど一面ブドウ畑の都市を通った「上部ライン」の終点がマインツなのである。ここで支流のマイン川 Main と右岸で合流し、約 27 km 西流してビンゲン Bingen に至り、左岸にナーエ川 Nahe を合わせ、ここで流れは直角に右折して西北方向をとり、幾重にも蛇行すること 63km でコブレンツ Koblenz に辿りつく。マインツからコブレンツまでが世に有名なラインの観光ルートであって、多くの遊覧船が上下する。マインツからは下りは約 4 時間半、逆のコブレンツからの上りは約 7 時間かかる。この間兩岸の斜面に作られたブドウ畑が美しく、また小高い丘の上や川の中洲に 20 近い古城や教会が見えがくれするのである。誰もが知るローレライ Lorelei の名所なところは、左岸に 2 つのゴシック寺院の尖塔を持つ中世の古い町オーバーウェーゼル Oberwesel を出て船が 10 分程進んだ頃、かつてマインツでは 900m もあった川幅もこの辺では兩岸の丘がせり出して川幅は 130m 位にも狭くなったところの右岸に 132m の岩山が見えてくる。これがローレライの岩である。有名なものでも、いざ実際に見ると失望することの多いのが大方の常であるが、このローレライはその最たるものかも知れない。ラインの美しい船旅はこのコブレンツで終わるがコブレンツの東南約 6.5km の地点でラーン川 Lahn を東から受け入れ、コブレンツではモーゼル川 Mosel (Moselle) を西から左岸に受け、更に北西に 60km 進んで、ベートーベンの生地であり、首都のボン Bonne に入る。その手前約 6.5km の地点にバート・ゴードスベルク Bad Godesberg という町が左岸に

ある。この町はボンに首都が置かれてから政府関係諸機関の所在地となり、また日本はじめ各国大使館のある外国公館地区となっている。尚、イギリスの首相チェンバレン Neville Chamberlain (1869. 3. 18—1940. 11. 9) とヒットラー Adolf Hitler (1889. 4. 20—1945. 4. 30?) が 1938 年 9 月 29 日の有名なミュンヘン会談に先立ってチェコスロヴァキア問題について同月 22 日予備会談をしたのはこの町であった。

ライン川はビンゲンからこのバート・ゴードスベルクまでが「中部ライン」Mittelrhein と称される。ここから川はボンを左岸にして北ドイツ平原に出て 25km でケルン Köln に入る。第 5 代ローマ皇帝ネロー Nero の母アグリッピーナ Agrippina は 15 年 11 月 6 日この地で生まれた。ここは当時ローマの植民地であって、オピドム・ウビオルム Oppidum Ubiorum の名であったが、第 4 代皇帝クラウディウスの妻となったアグリッピーナは帝に願って自分の生誕地に自分の名をつけて貰ったといわれる。それは「皇帝クラウディウスの御代の植民地アグリッピーナ」Colonia Claudia Ara Agrippinensis という名であったが、後この長い名が略され先頭の Colonia だけが残り、それが今日の Köln となったのである。これらのことについては筆者は別のところでも既に述べた。⁴⁾

ヨーロッパ有数にして、世界屈指のゴシック式建築のケルン大聖堂 Dom の 157m の双塔を左岸に仰いでライン川はいよいよ「下部ライン」Niederrhein となってオランダとの国境に近いエメリッヒ Emmerich まで 175km を流れる。この間に西ドイツ商業の一大中心都市デュッセルドルフ Düsseldorf がある。ここはハイネ Heinrich Heine の町である。近藤朔風訳「なじかは知らぬど心わびて…」のローレライの歌で日本ではハイネを知らぬ人なし、といえる程有名なこの詩人も後半生を過したフランスでは大したことはなかったのか、パリで死んだ彼の墓はパリのモンパルナスの墓地 Cimetière du Montparnasse の一隅に、案内板にもならず、探し当てるに困難な程人目の引くことのない質素なものである。

ライン川はデュッセルドルフの北北西約 19 km のデュースブルク Duisbu-

rg の市域のルールオルト Ruhrort で右岸に支流のルール川 Ruhr を受ける。

流れはボンを過ぎた辺りから山も丘も見えなくなり、代りに工場の煙突が増え、次第に美しいラインは消えて、川幅は広く、流れはゆるく、川は汚れ、物資を積んだ船や艇が忙しく行き交うようになる。そうしてオランダ領に入り、一大三角洲を作ってロッテルダム Rotterdam の 30km 先で北海に注ぐのである。

全長 1320km で、ヨーロッパで最重要の内陸水路であり、その交通量は北アメリカの五大湖に次いで世界第 2 位である。貫流したり、接する国が多いので呼称もドイツ語で Rhein, オランダ語 Rijn または Rhyn, フランス語で Rhin, ラテン語 Rhenus となる。語源はケルト語のレノス Renos にあってそれは「流れる」の意である。尚ライン川を世に紹介した最古の文献はローマの大史家タキトゥス Tacitus が 98 年頃著わした『ゲルマニア』*Germania* であるとされる。彼はその開巻第 1 頁で「レーヌス川はラエティカエ・アルペースの近寄り難い急峻な峰に源を発し、軽く曲って西に向い、北方の大洋に注ぐ」Rhenus, Raeticarum Alpium inaccessio ac praecipiti vertice ortus, modico flexu in occidentem versus septentrionali Oceano miscetur. と述べている。レーヌス Rhenus とは勿論ライン川のことであり、ラエティカエ・アルペース Raeticae Alpes というのは紀元前 15 年頃ローマの植民地となったところで今日のスイス東南部のグラウビュンデン州一帯である。

尚、本劇本行のここでの記述はエリザベス朝時代の作家によく知られたデンマーク式の酒飲み法であった。

4 Nemean

I. IV. 83

附図 3

Nemean は Nemea の形容詞形。ネメア Nemea の町はギリシアのペロポネソス Peloponnisos 半島のコリント地方 Korinthia にあり、ネメア川の上流の谷合にあって、左右を 651m と 737m の山に挟まれている。コリント Korinthos (Corinth) の南西約 200km の地点である。

ここはギリシア四大祭の一つが行われたところである。ネメアの祭りというのはギリシア神話中最大の英雄のヘーラクレース Herakles がネメアで、いわゆる「ネメアのライオン」を退治し、それを記念してゼウス神のために競技を創設したが、これが後にアイスキュロス等の劇で示されるテーバイに向うアルゴスの七将の総帥アドラストス Adrastus がその遠征の途次、ここで蛇に殺された、ある子供の葬りにその競技を復活させたものといわれる。「ネメアのライオン」の話は本劇のこの行に出ているが、ネメアの近くに出没して近隣の人畜を殺傷していた不死身のライオンをヘーラクレースが退治したもので、この行為はヘーラクレースの12の功業の一つであった。

このネメアの祭りの競技を始め、各種競技や音楽・劇などが行われたスタディオンは今日殆んど残っていない。

尚、他の3つの祭りのうちペロポネソス半島の西部エリス Elis の平野オリュムピア Olympia で真夏に行われる祭りはこの四大祭のうちで最も有名なもので、これは4年に一度開かれ、全ギリシアの年度の標準とされ、ギリシアでは紀元何年の代りに、このオリュムピア年度の何年という風に数えられたのであった。このオリュムピアの祭りが今日のオリンピックに継がれたものである。

2番目はコリント地峡 Corinth Isthmus のキラス・ブリシ Kiras Vrasi (イストミア Isthmia) で隔年に海神ポセイドン Poseidon のために行われたイストミア祭 Isthmian games があった。

最後の一つはデルフィ Delphi で行われるものであった。ギリシアの盛時におけるデルフィの勢力は花々しいものがあり、彼等はここを世界の中心と考えていた程であった。ここに彼等はアポローン Apollon の聖域をつくった。そこはパルナッソス Parnassos 山脈の西南端の斜面に約 200m に 130m の不等辺四辺形のもので、この聖域にアポローンの神殿を建てたが、この聖域の外程遠くないところにスタディオンがある。これは今日ギリシアで最も良い状態で保存されているスタディオンで勿論屋外であるがその音響効果などは今も素晴らしいものである。ここでアポローン神のための奉納の競技祭が

行われたのであった。祭りはピューティア祭 Pythian games といわれる競技である。これはかつてデルフィでの神託はピューティアという蛇が行っていたが、アポロンがこれを退治して聖地の主となって神託の司神となったため、その蛇の葬祭競技に始まったもので、初めは8年毎に行なわれていたが紀元前582年以降はオリュンピア祭の3年目に4年毎に行なわれるようになり、オリュンピア祭に次いで古代ギリシア人にとって重要な国民祭であった。

これらの四大祭は互いに重複しないようにその開催年と季節が工夫されていたものであった。またその種目はいずれも各種運動、戦車、乗馬等の競技であったが、ピューティア祭は器楽・歌・劇・朗誦も行なわれていた。

5 Lethe I. V. 33

現世の土地ではない。ギリシア神話で地獄を流れる川の一つである。意味は「忘却」である。尚、このレーテー川の他に次のような川が地獄を流れているとされる。

ステュクス Styx 冥界を七巻きにしている川。三途の川。

コーキュートス Kokytos 嘆きの川。

アケローン Acheron コーキュートスを支流とする。

オーケアノス Okeanos 世界のすべての河川・泉は地の果、太陽の没する西方の地下にあるこの川を源としている。

6 Hyrcanian II. II. 450 附図1-©

本文では Hyrcanian beast と出て、これは虎のことをいうが、この虎の出る地方が Hyrcania といってカスピ海 Caspian Sea の南から南東にかけての一角にあった古代ペルシアの一地方であった。屢々昔の英国の作家が虎の居住区として記するところであった。今日ではカスピ海に面するイランの北部を指す。

7 Ilium II. II. 474

『「ジュリアス・シーザー」地誌考』参看

8 Capitol III. II. 105

これについては既に『「ジュリアス・シーザー」地誌考』に詳述したところであるが、特にその374頁5行目で説明したようにシーザーが殺されたのは、シェイクスピアが本劇及び『ジュリアス・シーザー』劇で記しているのとは違って、このキャピトルではなくて——ポンペイウス劇場のポンペイウス像傍であった。このようにシェイクスピアは同じ誤りを繰り返しているが、チョーサーも同じ誤りを行っている。

その正確な場所はカンポ・デイ・フィオリの近くのビスキオニ区 Piazza del Biscione 92 番地にあるパンクラツィオ Ristorante da Pancrazio という名のレストランがそれである。このレストランの地下に今も当時の劇場の壁が残されている。

9 Vienna III. II. 239

英語、イタリア語が Vienna, ドイツ語 Wien, フランス語 Vienne, ラテン語 Vindobona または Vindobna。

言う迄もなくオーストリアの首都で人口約 164,5 万 (1969)。ドナウ川(ドイツ語でドナウ Donau, 英語でダニューブ Danube) が市を貫流するが市の中心はその南岸(右岸)にある。ドナウ川の交通路としては元より、バルト海とアドリア海 Adriatic Sea, そしてイスタンブール Istanbul と西ヨーロッパを結ぶ南北・東西交通の要地から新石器時代から人が住み、紀元前 400 年から紀元前後のラ・テーヌ La Tène 文化の時期にケルト人が住みついた。彼等はここをヴィンドブナ Vindobna と称したが、それは「白い城」の意で

あった。1世紀頃にローマ軍団の駐屯地となったが彼等はこの地の名を元のケルト名の Vindobna のままで借用した。今日の名前 Wien となったのは、880年であった。

このように交通路の重要性はこのウィーンを政治・経済の中心とし、1910一年にはオーストリア・ハンガリ帝国の首都として人口も 200 万人を超えるなどそれに伴う歴史も古い。この他ウィーンは森の都・芸術の都として世界に余りにも有名なことはここで詳述するまでもない。

10 Provincial roses

III. II. 276

附図 2

Provincial roses とはフランスのプロヴァンで生産されるバラのことであるが、Provincial の国有名詞はプロヴァン Provins でこの町はパリの南東 80 km の台地の上に古くから商業の中心として発達した町で、今日も尚 12 世紀 — 13 世紀のものとする城壁がよく保存され、また 13 世紀に建てられたという 44 m もの高さのシーザーの塔が丘の上にある。14 世紀にヨーロッパを襲った黒死病はこの町で猛威をふるって町を衰亡させ、また百年戦争でも大きな被害を受けた。更に 16 世紀の宗教戦争の間の 1592 年にアンリ四世 (1553. 12. 13—1610. 5. 14. r. 1589—1610) によってこの町は包囲されるなど、この町は 14 世紀以来このような大事件によって衰微の道を辿った。

シェイクスピア時代と同じく今日もバラ栽培で知られている。

11 Normandy

IV. VII. 82

附図 2

フランス西部。セーヌ下流地域からコタンタン半島 Cotentin にわたる地方でイギリス海峡に臨む。東北方はブレル川 Bresle, 西南方はクエノン川 Couesnon を境とし、以前はルーアン Rouen を主都とした州名であったが、現在はマンシュ Manche, セーヌ・マリティーム Seine Maritime, カルバドス Cal-

vados の三県とウール Eure 及びオルヌ Orne 両県の一部を含む地方であるが川や山脈といった目に見える自然の境界がない。

地名の由来は9世紀以来この地方に侵入したノルマン人 Norman が建設した公国にある。ノルマンとは「北人」Northmen の意で、スカンジナビア半島を根拠としていたゲルマン族の一派であった。彼等は例の巨大な民族移動の嵐が収まってフランク族が覇権を確立した頃に活動を始めた。その初めは、793年6月8日早朝彼等ノルマン人は3隻の船に乗ってスコットランドのリンディスファーン島を襲った(『「ヘンリー八世」地誌考・後篇』参看)。そうして「海賊」の名でよばれた彼等の移動・襲撃はヨーロッパ各地に及び、2世紀にわたって当時の世界を恐怖に陥入れたのであった。彼等の侵攻は単に海岸地方に留まらず、内陸にも及び843年にはロワール川 Loire 河口のナント Nantes が、また今日のパリなどは845年、857年、861年とその大掠奪を受けた。ドイツ地方では851年にエルベ川下流の全村落が襲われ、ハンブルグ Hamburg は見る影もない灰燼に帰した。彼等はライン川沿岸も脅し、襲撃された主な都市はケルン、ボン、ビンゲン、コブレンツ、マインツと全く軒並みであった。

このように彼等は侵入・襲撃を繰り返すばかりでなく、やがてその土地に定着し建国するようにもなった。また一方彼等のこのような暴行に手を焼いた国・都市の中には彼等に一定の封土を与えて定着させて他への被害を少なくするように方策するものもあった。その一つがこのノルマンデーであった。9世紀以来北フランス地方に侵入したノルマン人を西フランク王(フランス王)シャルル三世(単純王) Charles III (le Simple)(879. 9. 17—929. 10. 7)は彼等の首領のロロー Rollo(別名ロルフ Rolf または Hrolf)(860—933)に911年、今日のノルマンデーの名でよばれる一帯の土地を与えたのであった。ロローは「公」の称号を名乗った。この公国の第6代を継いだのが人も知るノルマン・コンクエストを行って英国王となったウィリアム征服王であった。

12 Pelion

V. I. 253

附図 3

ギリシア語では Pilion. 北部ギリシアのテッサリア Thessalia (Thessaly) 地方の東海岸にあるヴォロス Volos の町の近くにある約 1548m の山。古いヴォロスの町 Ano Volos はこのペーリオン山の崖の上にあった。またこの山はギリシア神話に出るアローアダイ (またはアローエイダイ) Aloadai と称される 2 人の巨人, すなわちオートス Otos とエピアルテース Ep(h)ialtes がオッサ山 (15 項参看) をオリュムポス山の上におき, この上に更にこのペーリオン山を重ねて天に登り, 神々と戦おうとして雷電に打たれたところであり, また同じ神話でケンタウロス族 Centaur の一人ケイローン Cheiron の住んだ山でもあった。

13 Olympus

V. I. 254

『「ジュリアス・シーザー」地誌考』参看

14 eisel

V. I. 276

eisel とは酢 vinegar に対する古語であるが, 文脈からはたしかに川を意味する。そうしてその川はデンマーク等のどこかの川のことであつたらと推測する向もある。それは例えばデンマークの Oesil, オランダの Yssel などの川とされるがそれ以上のことは不明。

15 Ossa

V. I. 283

附図 3

前出 12 項のペーリオン山とオリュムポス山を直線で結んだ略中間に位置する 1978m の山。

シェイクスピアは前出の 2 つの山とこの山についてギリシア神話の筋を引

いている。

16 Barbary

V. II. 147

附図1—①

北アフリカ海岸地方で東はエジプト境界から、西は大西洋にまでのびる広範囲の地域をかつてはこの名でよんだが、今日ではモロッコ Morocco, アルジェリア Algeria, チュニジア Tunisia それの場合によってはリビア Libya の諸国の海岸地方がそれに当る。

Barbary の語源はアラビア語のベル ber = men という語を繰返して berber としたもののから転訛したといわれる。この地方に住んでいた者たちはベルベルといわれる航海業者、いわゆる海賊であって、その活躍は16世紀以来盛んとなり、特に17世紀にはその最盛期に達し、そのため1801年から1805年にかけて、更に1815年にアメリカと事を構えて、いわゆるバルバリー戦争 Barbary Wars を起すなど諸国との紛争が多かった。

本文にあるように、かつては馬の名産地でそれをヨーロッパに輸出していた。

(昭和53年5月18日受理)

〔注〕

1) デンマークのユラン半島(ユールン半島) Jylland(英語での発音を日本語表記するとジャトランド、ドイツ語のではユトランド。綴りは共に Jutland) の東海岸とスウェーデン南西海岸との間に狭まれた水域をカテガット海峡 Kattegat というが、エラスンド海峡はこのカテガット海峡の一部である。(附図1—①)

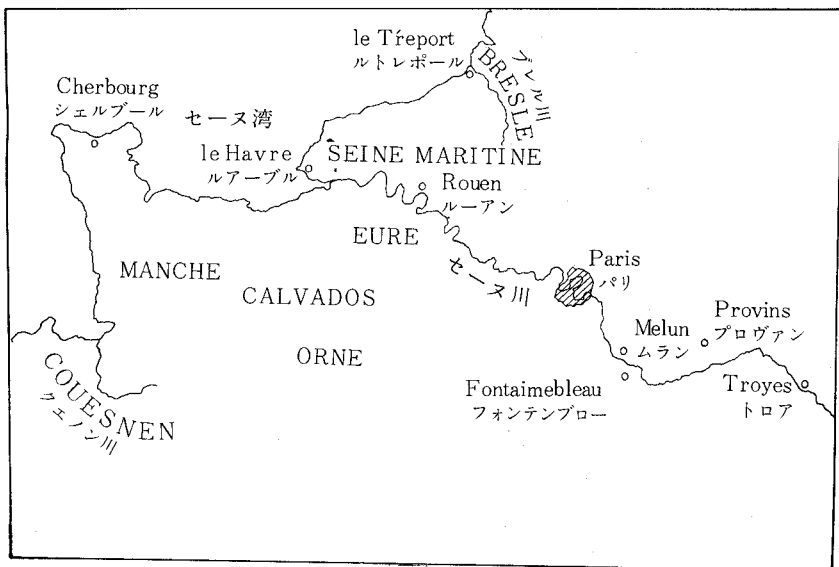
2) ポーランドと東ドイツの北部一帯のバルト海 Baltic Sea に沿った地方である。(附図1—②)

3) デンマークの歴史家(?1150—?1220)。Grammaticus とは「学問を修めた」の意である。ラテン語で『デンマーク史』 *Gesta Danorum* (*Historia Danica*) を書いた。全16巻中の前半9巻は先史時代を扱ったものである。『ハムレット』の原話であるアムレス Amlæth の伝説が収められているのはその第3巻であって、実に約1万語に及ぶ長い物語である。

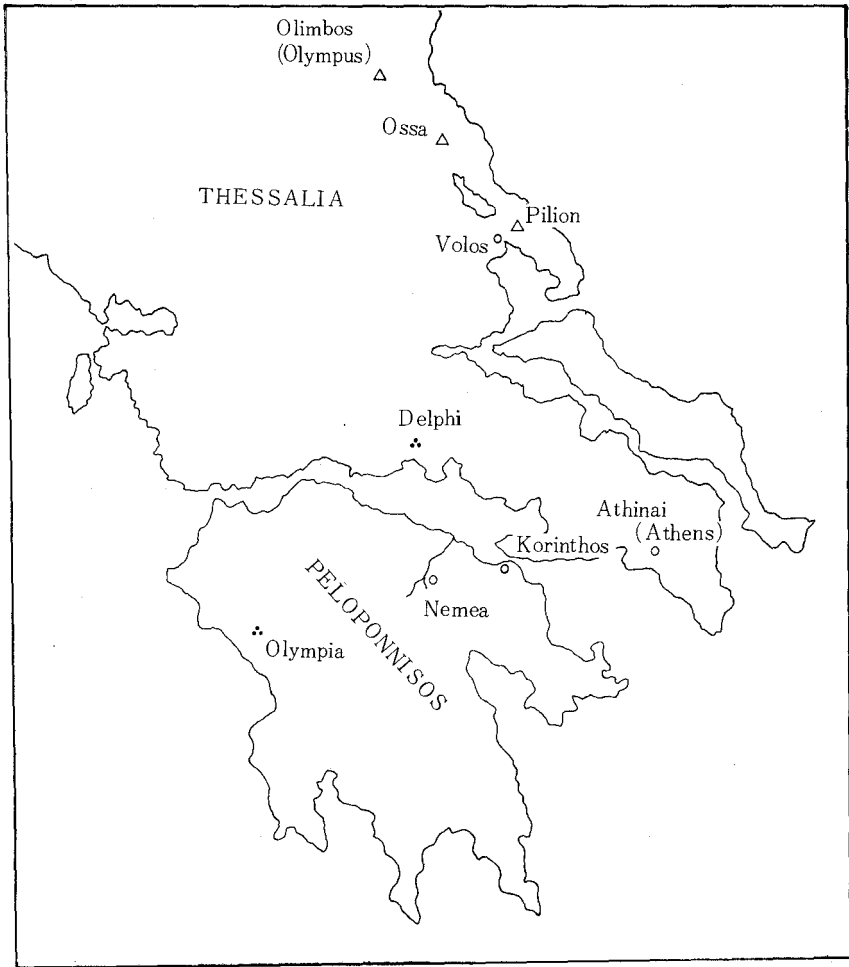
4) 竹内 豊：『BOUDICCA — 真実と詩』 室工大研報 8—3



附図 1



附図 2



附図 3